

軍 事 史 学

第 55 卷 第 3 号

卷 頭 言

ノモンハン戦史の新たな地平

秦 郁彦

大規模な戦争（戦闘）の歴史は、戦った当事国双方の第一次資料が過不足なしにそろわないと、全体像はつかみにくいし、適切な評価も期待できない。ノモンハン戦については久しくこの条件が欠けていた。

日本側の公式戦史である戦史叢書の『関東軍（上）』が刊行されたのは一九六九年だが、ロシアがジュニコフ將軍の公式報告書をふくむノモンハン関連の文書を大規模公開したのは一九九九年である。前後してソ連軍の人的被害が日本軍を上まわる事実を示す統計が発表され、風景ががらりと変った。

日本軍の「惨敗」という既成のイメージがゆらぎ、「引き分け」説（中西輝政ら）ばかりか、「日本軍の大勝利」説（渡部昇一ら）すら出現した。二〇一四年に刊行した拙著の『明と暗のノモンハン戦史』（PHP研究所）では、目的達成度など総合的な観点から「引き分けに近い日本の敗北」と総括している。

史料公開の恩恵はソ・蒙・欧米の歴史家にも波及し、私をふくむ日本の研究者に刺激と示唆を与えてくれた。二つの事例を紹介しよう。ひとつは公定史観（日本の侵略性とソ蒙軍の大勝に縛られてきたロシアの研究者からの「相互の誤解に起因する衝突路線から生じた偶発的戦争」（ワルター・ノフ大佐）という画期的な新解釈だった。

もうひとつは戦闘の拡大を望まない天皇と大本営に、関東軍が従わず暴走したという通説に疑問を投げかけたモンゴル（旧外蒙古）の若手歴史家エルデニバートルの切り口である。

彼は関東軍の第二十三師団（兵力七、五〇〇人）がハルハ河に架橋して西岸へ侵攻したが、数百台のソ連軍戦車に反撃され、数時間後に東岸へ退却した時のある情景に注目した。そして退却路となった軍橋のたもとに、なぜか大本営作戦部長の橋本群中将がたたずんでいた内情を探りだし、関東軍と大本営は「対立というよりもむしろ合作の方が目立つ」と指摘した。情報源は生前の橋本証言を収録した故クックス博士の著書である。

それによると、橋本は「事態を局地に限定」し、「戦場はボイル湖以東に限定を」と命じた一九三九年六月二十九日付の大陸命と大陸指の趣旨を説明するため、七月二日に関東軍司令部に出張する。そして植田謙吉軍司令官から翌日のハルハ渡河作戦を観戦するよう勧められ、現地に向いた。

国境線のハルハ河を大命に背いて越境するのは、陸軍刑法では死刑の大罪であることに橋本が留意した形跡はない。しかも越境地点は、地図上で「ボイル湖以東」と見えなくもないという「逃げ道」まで用意したトリックを勘案すると、大本営は関東軍と「共犯」関係にあったと言われてもしかなかった。

ちなみに戦史叢書や関係の公文書は、橋本の動静には触れていない。『昭和天皇実録』から察すると、天皇がハルハ渡河戦を知ったのは七月十一日らしい。つまり天皇が知らぬ間に戦は始まり終わってしまったのである。

橋本はクックスに「この作戦は失敗するに違いないと予想した」と語っている。退却の混乱のなかで、橋本は一本だけの軍橋を守るため手近の砲兵を指揮したという。もしジュニコフが追撃の手をゆるめなかつたら、越境した第二十三師団は、橋本の眼前で壊滅していたかもしれない。

（会員）